

横浜ダンスコレクション EX2015

コンペティションII -新人振付家部門- 審査員総評

今年の新人部門のクオリティはコンペティションIと肩を並べる高レベルだった。

最優秀賞、奨励賞、いずれも瑞々しいアイデアと構成力、技術力を兼ね備え、何より世界に向かって開かれた機智があることが舞台芸術として最も大切な要件を満たしている。

中屋敷南の作品はフラジイルな透明感としたたかな身体性が共存し、ダンス表現ならではの意識を逸らさない求心力があった。田村興一郎の作品は新人らしからぬ自然界のダークサイドを扱い、暴力と抵抗の対比に現代の危うい死生観を覗かせた。賞は逃したが酒井直之の作品は理屈ぬきに観るひとを元気にするポジティブな青春謳歌、気恥ずかしさすら突き破る肯定感があった。

再挑戦組が実り多かったことも伝えておきたい。(住吉智恵)

コンペティションIIも、Iに勝るとも劣らぬ面白さだった。思春期の危うい瞬間を繊細なタッチで描いた中屋敷南『おんなのこ』は、作品としての完成度が高い。田村興一郎『ハゲワシと少女』は、不気味な造形と咳の音が自分の内にある暴力性を浮かび上がらせる。日本の若手では珍しい主題を選び取ったことも、これからに期待を抱かせる。惜しくも受賞には至らなかったものの、酒井直之『HENSHIN』はエネルギーで楽しかった。江上真子『梓なし物語』と大北悟『カリモノことば』は作品としては未完成ながら、誰の借り物でもない、自身の身体から生まれた独自の動きがいくつも見られ、とても心惹かれた。こうした自分の身体との対話から新たな表現が次々と生まれてくることを楽しみに待ちたい。(浜野文雄)

私がダンサー目線でみる重要ポイント五か条、

- ①動きの必然性 (踊っている本人が必然と実感を持って動いているか)
- ②オリジナル性 (借り物ではなくその人ならではのもの)
- ③ひらく (踊っている本人の中だけにとどまらず外へ、世界へひらかれているか)
- ④裏切り (次に何が起こるか予測できない裏切りがあるか。観客に対してだけではなく自分自身への裏切りも重要)
- ⑤問題意識を持つ (既存のものを疑う)

どの身体も真摯に向き合いどの作品もそれぞれに光るところがあった。中でも新人賞の中屋敷南の作品は丁寧に身体と向き合い、前回エントリー作品とは異なる作風で振付の幅の広さを感じ続がみたいと思わせるものだった。また奨励賞の田村興一郎の作品には危機感があり「いま踊る動機」を強く感じた。平均年齢22歳という若さ、無限の可能性を持つ。誰に何を言われようが自分の「いまの踊る動機」を信じてやりたいことをとことんやって欲しい。

やりたいことをやる強さを。完成度よりもたとえ荒削りでも勢いのあるものを。自分のコントロールのきかないところまで冒険すること。作品からはみ出ること。作品をぶち壊すこと。ぶち壊した先にいる俯瞰したもう一人の自分に出逢うこと。次回も楽しみにしている。(森下真樹)

絵画(壁画)や彫刻(呪物)といった表現よりおそらく早い段階で、ダンス(舞踊)は音楽や歌と同時に生まれたはずである。時間的表現の誕生。それらは「アート」という便利な言葉が生まれるはるか以前の話である。その誕生の当初の目的は神への供儀や宗教的儀式であったに違いない。もっとフォークロア的で生や死に根ざしていた。現在、「アート」という言葉の庇護のもと、あらゆる表現はその目的を喪失してしまっている。それは優れたアートであればあるほど顕著で、「敗北」することが「アート」の存在意義だとする逆説が成り立つ。特にダンスの場合、その傾向は顕著ではないか。日常の生活や仕草から身体にこびりついた動きや感覚、意識をどうダンス化するか。自身の肉体や意識はどこまで個人のものなのか。古来、ダンスを生んだ人々と自分たちの肉体はどう繋がっているのか。踊る人間もその場で鑑賞する人間も「同時代」というときの中で、ヒトという「肉体的性」を共有している。

「同時代性」という「いま」「ここ」でしか生まれぬダンスを考えていって欲しい。(ヴィヴィアン佐藤)